

世界に誇る「日本の心」



正直

勤勉

礼節

孝行

思いやり

家庭や学校、会社など、ふだんその中にいるとなかなかよさや問題点に気づかないものの、外から眺めると比較的簡単に見えてくることはありませんか。たとえば、川べりに立っている「目の前の流れしか分からないのに、高いところから見ると川の姿、形がよく見えてくるよ……」。

今回は、外国人から見た日本の印象や、日本を飛び出し外国で活躍する日本人の姿などをもとに、日本そして日本人が培ってきた「心」について考えていきたいと思います。



「日本はすばらしい国」

「ねえ、お父さん、その新聞記事、すごくない。奇跡だよね」

夕食を終え、新聞を読んでくつろいでいる父親の村田仁志さん（40歳）に、いつものように声をかけてきたのは娘の知美ちゃん（13歳）です。

仁志さん一家は、妻の佳子さん（37歳）と中学一年生の知美ちゃんの三人家族。

知美ちゃんは小学六年生のときに新聞を活用した授業が行われるようになったことをきっかけに、少しずつ新聞に目を向けるようになりました。そしてひと月に

数回、疑問やおもしろいと感じる記事を目にすると、仁志さんに質問したり、意見を求めたりするようになりました。

知美ちゃんが指した箇所には「日本はすばらしい国」という見出しがありました。内容は、日本のある賞を受賞したイギリス人が、授与式じゅよしきに出席するために来日した際の出来事についてでした。そのイギリス人は今回が初めての来日。記者から日本の印象を聞かれたところ、伊豆旅行でスーツケースと財布さいふの入ったバッグを駅のホームに置いたまま別の電車に乗ってしまったことを披露ひろうしました。そして、その荷物が盗ぬすまれることなく手元に戻ってきたことに大いに驚き、「日本はすばらしい国」と絶賛ぜつざんしたのでした。それを「奇跡」と言った知美ちゃんに、





仁志さんは「確かに運がよかったよね」と言いながら、次のように語りました。

「でも、日本は昔からそういう国だったんだと思うな。今から四百年以上前に、キリスト教を広めるためにやって来たフランシスコ・ザビエルは、日本人について『キリスト教徒にしる異教徒にしる、日本人ほど盗みを嫌う者に会った覚えはありません』（ピーター・ミルワード著、松本たま訳『ザビエルの見た日本』講談社学術文庫）と手紙に書いているんだ。江戸時代末期から明治・大正にかけてやって来た外国人の中にも、同じような声もあるんだよ」

仁志さんの言葉に、今の日本はどんなのかな」と感じる半面、昔から日本がよく思われてきたと聞かされると、なんとなく誇らしく思う知美ちゃんでした。



「私、日本大好きなの」

数日が過ぎた、村田家のある日の晩ごはん
はんどの会話です。

「お、今日は変わった料理が並んでるね。タコスか、メキシコ料理だね」

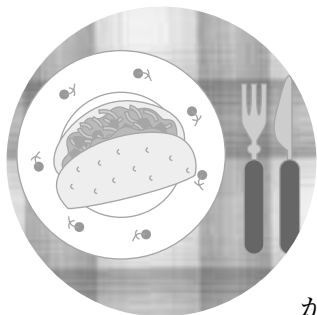
「前に話したと思うけど、市の広報誌を見て応募したメキシコ人女性の料理教室

が、今日あったのよ」

仁志さんの言葉
に笑顔でこたえる
妻の佳子さん。「ナ
タリアさんって言
うんだけど、とて
もいい先生だった

の。『私、日本大好きなの』って言いながら、メキシコの料理以外にもいろいろと教えてくれてね」という言葉から、楽しいひとときであったことが伝わってきます。

ナタリアさんは三十年前に日本人の男性と結婚し、姑と一緒に暮らしながら日本の料理・作法を仕込まれました。そのため、味噌汁はもちろん、魚をさばいて刺身にすることもできますし、煮魚や肉じゃがなどの和惣菜も得意です。そのナタリアさんの話で、佳子さんの心に強く残ったのは、次のことでした。



「私が三十年前に日本に来て、すばらしいと感じたのは子供が大人を尊敬していると感じたことなの。自分の親を大切に、言われたことはきちんとする。だから、みんな気持ちよく行動することができたんだと思う。食事のときも、お茶碗ちゃわんを持って食べる、箸はしを正しく持つ、迷い箸ちがひばしはしないなど、いろいろなことを教え

るでしょ。そういう中で、日本の文化は受け継がれてきたんじゃないかしら。私も自分の娘には『大人を尊敬するように』と言って聞かせてきたのよ」

仁志さんと一緒に佳子さんの話を聞いていた知美ちゃんは、また一つ日本のよさを知った思いがしました。





世界から 認められた 日本

私たちはふだんの暮らしの中で、日本のよさをさほど意識することなく過ごしています。しかし、意識しないことで次第に忘れられていく日本の心や文化があるとするとすれば、残念なことです。


さきの会話に登場したザビエルは、アフリカ・モザンビーク、インド、マレーシア等で宣教活動せんきょうかつどうを行い、天文十八年（一五四九）に来日しました。そして日本人のことを知るにつけ、「私が遭遇した国民の中ではいちばん傑出けつしゅつしている……大変心のよい国民で、交わりかつ学ぶことを好む」（アルペ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄（下）』岩波文庫）と見るようになったのです。

明治十年（一八七七）に東京大学の教師として来日したエドワード・モースも、

次のように日本人を讃えています。

「自分の国で人道の名において道徳的教訓の重荷おもにになつてゐる善徳ぜんとくや品性ひんせいを、日本人は生まれながらに持つてゐるらしいことである。衣服いふくの簡素かんそ、家庭の整理、周囲の清潔せいけつ、自然およびすべての自然物に対する愛、あつさりして魅力みりょくに富む芸術ぎゆつ、拳動きやうどうの礼儀正しき、他人の感情に對しての思いやり……これらは恵まれた階級の人々ばかりでなく、最も貧しい人々も持つてゐる特質である」(石川欣二訳『日本その日その日(一)』平凡社東洋文庫)

幕末・明治には多くの外国人が日本へやつて来ましたが、彼らは「世界一礼儀正しい」「本物の平等精神が社会の隅々すみすみまで浸透しんとうしている」などと、日本人の心のあり方や生き方を認めてきたのです。



「もの」と
共に「心」も
大切に

現代においても、日本は多くの分野で世界から認められています。

産業面においては、その優れた技術力をもつて、さまざまな分野で高い市場占しじょうせん有率ゆうりつを獲得かくとくしていますし、文化面においても、日本の歌手が歌うJポップ(音楽)やアニメ、マンガは人気を得ています。こうしたことに加え、実際に海外で働

く日本人たちの姿もあつてのことでしょうか、最近、海外の世論調査には日本への高い評価が寄せられています。たとえば、イギリスの公共放送局BBCの世論調査では毎年、政治・経済・安全保障分野で世界によい影響を及ぼす国・国際機関についての評価を調査していますが、そこで日本は高い評価を得ています。これは自信を持つてよいことでしょうか。

とはいえ、経済優先、もの優先であつてはいけません。かつて日本人が賞賛されたのは、「もの」と共に「心」を大切に
する姿勢があつたからにほかなりません。今を生きる私たちは、こうした先人の心を胸に刻み、社会そして世界へと臨んでいくべきではないでしょうか。



ブータンで最も尊敬された日本人

日本人には昔から、他国でその国のため、人々のために取り組んできた先人が多数います。その中から、ヒマラヤの国・ブータンで「農業の父」と慕したわれた西岡京治にしおかけいじさん（一九三三〜九二）を紹介しましょう。

ブータンは急峻きゆうしゆんなヒマラヤ山脈中に位置し、人口の約八割が農業に従事しています。その地に、海外技術協力事業団（現・国際協力機構）の農業指導者として、西岡さんが夫人と共に赴任ふにんしたのは昭和三十九年（一九六四）のこと。西岡さんは人々の生活を少しでも豊かにできたらと願っていましたが、当時の農業局の幹部

は隣国・インドから派遣はけんされたインド人で、「自分たちのほうが農業事情を知っているから」と歓迎されませんでした。

西岡さんは、周囲の人々の理解を得ることから始めました。まず農業試験場を作り、日本から導入した野菜を栽培さいばいして見せ、徐々に評価を得ていきます。稲作については、日本では縦横たてよこ一定間隔で植える「並木植えなみきうえ」が当たり前ですが、ブータンでは勝手気ままに植えられています。これでは手押し除草機じよそうきが使えず、苗なえの間の風通しも悪く、生育もままなりません。そこで、「並木植え」のよさを丹念たんねんに説き、切り替えさせていきました。

収穫量は大幅に向上しました。

焼き畑農業を営み、収穫量が下がると別の土地に移る生活をしていた極貧地域の人たちとは、水田作りの利点について幾度も話し合いました。会合は八百回のぼったといえます。その言葉を受けとめた人々の生活は瞬く間に安定し、学校



や診療所も作られるようになりました。

農業試験場はのちに国家的農業機械化センターへと拡大、指導を受けた実習生は、国の農業を牽引する存在となりました。西岡さんは一人ひとりの心に火をつけ、近代的な農業国へと導いていったのです。一九八〇年には、その功労を讃え、国王から「ダシヨー」（最高に優れた人の意）の爵位が授与されました。これは、外国人としては唯一の例です。

その活動は、一九九二年に現地で亡くなるまで二十八年間に及びました。葬儀には、彼を慕う五千人もの人たちが全土から弔問に訪れました。西岡さんはブータンで最も尊敬された日本人とされています。（小暮正夫著『ブータンの朝日に夢をのせて』くもん出版刊を参考）

三代続くブラジルでの巡回診療

「ジャポネース・ガランチード」——こ

れはブラジルの人々が日系人に対して、

「日本人なら間違いない」という意味で

用いる言葉です。明治以降、日本政府の

移民政策によって多くの日本人がブラジ

ルに渡っていきましたが、先人たちはさ

まざまな困難の中、勤勉、工夫、挑戦、

協力し合う心をもって生き抜き、ブラジ

ル社会に貢献していきました。そうした

姿が日系人への信頼を高めていったので

す。その中には、医師として移民たちの

健康を支え、かつ、ブラジルの医療向上

に尽くした細江静男さん（一九〇一〜七

五）の姿もありました。

日本人は当初、コーヒー農園で契約労

働者として働きましたが、のちに土地を

借りたり買ったたりして、自営農家として

独立し、日本人移住地を形成していきま

した。その多くは、都市部から遠く離れ

た医師などいない土地でした。日本政府

は移民事業を失敗させてはならないと、

当初より腐心し、移民の健康維持のた

め、移民の増加とともに多くの医師を派

遣しました。そのうちの一人が細江さん

でした。

細江さんは慶應義塾大学医学部を卒業



KEN

後、恩師から「ブラジルに行つてはどうか」と勧められ、その年（一九三〇）の夏に外務省留學医としてブラジルに渡りました。細江さんにはすでに三人の娘がいました。そのうちの二人を親元に預けての渡航でした。外務省の委託期間（いんたくきかん）は三年でしたが、生涯ブラジルに留まり（とど）、移民のための巡回診療や病院づくりに尽くします。移民を残して帰国はできないという心からでした。

アマゾン流域の奥地までよく回診に行つたことから、「アマゾン先生」と親しまれた細江さん。回診は、年間で約百三十日、百か所以上、約四千人。病人であれば、日系・非日系を問わず診療を行うというものでした。ブラジル日系社会の保健衛生、医療に関するすべての組織・

施設の創立に深くかわり、ブラジル社会の医療向上に大きな足跡を残したと言われています。

一九七五年に細江さんが亡くなられてからは、巡回診療は娘婿の森口幸雄さん（むすめむこ）として孫の秀幸さん（ひでゆき）に引き継がれました。日本全土を超乎面積を巡り（めぐ）、移民の健康を守っていくことはたいへんなことです。しかし秀幸さんは、「おじいちゃんに診察してもらい、お父さん、今度は息子さんのあなたに面倒（めんどう）を見てもらえて幸せだ」という人々の言葉を支え（はげ）に励みます。自己を犠牲にし、相手のために尽くすという、利他の心が三代にわたつて受け継がれているのです。（丸山康則著『ジャポネース・ガランチード——希望のブラジル、日本の未来』モラロジー研究所刊を参考）

「日本人の心」 を大切に 受け継ぐ

「世のため、人のため」——こうした言葉
を父母や祖父母から聞かされてきた人は
少なくないはずです。それは、私たちが
成長する過程での励ましや叱咤であつ
たかもしれませんし、あるいは、父母や
祖父母が自分自身に対して言い聞かせる
ために口にしていた言葉かもしれません。

こうした言葉が自然に交わされる社会
を日本人は築いてきました。そのうえ
に、ブータンの西岡京治さん、ブラジルの
細江静男さんをはじめ、多くの日本人

の心を持ったよき先人・先輩たちを、私
たちは送り出してきたのです。

細江さんが亡くなったあと、お孫さん
の森口秀幸さんは遺作集の中で、次のよ
うな文章を記しています。

——祖父は、ある時私に聞いたことが
あった。「秀坊、幸せって何だろう」と。

私はその時何と答えたかは忘れたが、祖
父はこう私に言った。「幸せっていうのは
ね、他人を幸せにしてあげることができ
ることを幸せって言うんだよ」。おじい
ちゃんも幸せだったね——

正直、勤勉、礼節、孝行、他者への思
いやり……「日本人の心」は、決して忘
れ去られてよいものではありません。先
人が守り続けてきた「日本人の心」を大
切に受け継いでいきたいものです。